

2014年4月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

秘密のこぼ

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「陀羅尼品」

1. 陀羅尼品の概要

- (1) 葉王菩薩が釈迦牟尼世尊に法華経の功德について問い、釈迦牟尼世尊が答えます。
- (2) 葉王菩薩・勇施菩薩が陀羅尼（だらに）を説きます。
- (3) 毘沙門天王・持国天王が陀羅尼を説きます。
- (4) 十人の羅刹女と鬼子母が陀羅尼を説き、釈迦牟尼世尊が羅刹女たちを讃えます。

2. 陀羅尼品の主旨

この品は、法華経のこれまでの説法に感激した人びとが「かならずこの教えを守護いたします」と、つよいことばで誓言し、その守護のための神呪（じんしゅ）を説いた章で、全章が梵語そのままの陀羅尼（総持真言＝あらゆる悪をとどめ、あらゆる善をすすめる力をもつ秘密のことば）に満ちています。

（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 214）

3. 五種不翻

鳩摩羅什（くまらじゅう）をはじめ、仏教経典を中国語に翻訳した人たちは、どうしても翻訳しないほうがよいと判断したものは、言語の音に似た漢字をあててすませ、わざと言語のまま残しておいたのです。それを五種不翻（ごしゅふほん）といいます。（同p. 215）

- ・インド固有の動植物や、伝説のもの名

（例）迦楼羅（かるら＝竜を取って食べるという鳥の王の鬼神）、緊那羅（きんなら＝天上界に住んで音楽を奏しているという神）

- ・一つの語におおくのことがふくまれているので、一語に翻訳すると原意が十分に尽くされないもの

（例）陀羅尼（だらに＝次節で説明します）

- ・神秘的なことば、いわゆる秘密の語でこれを翻訳すればその奥深い神秘的な意味が減殺されてしまうもの

（例）この品に出てくる神呪

- ・むかしからの習慣にしたがって、原語のままにしておいたもの

（例）阿耨多羅三藐三菩提（あのかたらさんみゃくだんぼだい）

- ・翻訳すれば、真の意味を失ってしまうもの

（例）仏陀（ぶつだ）、菩提（ぼだい）

4. 「陀羅尼」の意味

- ・聞いた教えを心にたもって忘れぬ力。
- ・あらゆる悪（不幸を含む）を止め、あらゆる善（幸福を含む）をすすめる力。総持（そうじ）という。
- ・それを唱えれば仏の世界へ直入できるという神秘的な言葉。真言（しんごん）という。

5. 四天王

四天王とは、インド神話の神である帝釈天に仕える四柱の神です。帝釈天とともに仏教に取り入れられて、仏法の守護神になっています。

持国天王（東方の護神）、増長天王（南方の護神）、広目天王（西方の護神）、多聞天王（北方の護神、単独で祀られるときは毘沙門天王）

6. 羅刹女

羅刹（らせつ）とは、通力を使って人を操ったり、食べてしまうという恐ろしい鬼です。女性の羅刹が、羅刹女（らせつにょ）です。ここには十人の羅刹女の名があります。

藍婆（らんば）・毘藍婆（びらんば）・曲齒（こくし）・華齒（けし）・黒齒（こくし）・多髪（たほつ）・無厭足（むえんぞく）・持瓔珞（じようらく）・皐諦（こうたい）・奪一切衆生精氣（だついつさいしゅじようしょうけ）。

7. 鬼子母神伝説

その昔、鬼子母神はインドで訶梨帝母（カリテイモ）とよばれ、王舎城（オウシャジョウ）の夜叉神の娘で、嫁して多くの子供を産みました。しかしその性質は暴虐この上なく、近隣の幼児をとって食べるので、人々から恐れ憎まれました。

お釈迦様は、その過ちから帝母を救うことを考えられ、その末の子を隠してしまいました。

その時の帝母の嘆き悲しむ様は限りなく、お釈迦様は、「千人のうちの一子を失うもかくの如し。いわんや人の一子を食らうとき、その父母の嘆きやいかん」と戒めました。

そこで帝母ははじめて今までの過ちを悟り、お釈迦様に帰依し、その後安産・子育ての神となることを誓い、人々に尊崇されるようになったとされています。

（雑司ヶ谷鬼子母神のホームページより、この寺院では「鬼」の字に角をつけないのが正式の表示です）

8. 心の転換

十羅刹女と鬼子母は、釈迦牟尼世尊の教化を受けて、仏法の守護神となりました。心の転換が行なわれたわけです。ここにも、一切衆生悉有仏性の教えが、さりげなく説かれています。

9. 羅刹女・鬼子母のことば

(1) 羅刹女・鬼子母のことば (庭野日敬著『新釈法華三部経 9』p. 232)

羅刹女と鬼子母たちは、陀羅尼を説いた後に、次のように述べました。

① 罪の報い

もし、この総持真言にそむいて、なおかつ法華経の説法者を悩ますものがありましたら、その罪の報いとして頭がバラバラに裂けてしまうであります。

② 罪の重さ

その罪は、父母を殺すのと同様の大罪であり、また、油を虫ごとしぼる罪や、斗(ます)や秤(はかり)をごまかす罪や、提婆達多が教団の和合を破ったのと同じような大罪であります。

③ 罰をみずから受ける

それゆえ、法華経を説く法師を害するものは、まさにこのような罰をみずから受けるであります。

(2) ことばの真意 (同p. 234)

① 報復ではない

これを見ますと、いかにも、この羅刹女たちが、法華経の敵にたいする報復を誓っているようですが、やはりそうみではいけないとおもいます。まだ仏弟子としてじゅうぶんな徳を積んではいませんから、勢い余って激しいことばを吐いたとみることもできましようけれども、そうだとすれば、徹底した寛容を説かれるお釈迦さまが、無条件に「善哉、善哉」とおほめになるはずがありません。

① 罰の原理

罰の原理はまえにのべたとおりであって、その原理はゆらぐものではありません。しかも、この偈をよく検討してみますと、「頭を割ってやろう」とはいわず「頭が割れるであろう」といい、父母を殺す罪等々とおなじような罰を「あたえてやろう」とはいわず、「得るであろう」といっています。

それらは、やはり、みずからの罪によってみずから罰せられるという〈業〉の原理のとおり表現であります。このことをしっかり理解しなければ、卑俗な見解におちいりやすいですから、注意が必要だとおもいます。

10. 罰の原理 (庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p.128～130)

(1) 十四謗法

「次のような心をもった人間には『法華経』を説いてはいけない」といって、このお経の精神にそむく欠点や考えちがいが十四カ条にわたってあげてありますが、これも、「そんな人間は相手にするな」という意味ではなく、「まず、そういう欠点や考えちがいを除いてやってから『法華経』を説いてやらないと、効果がないばかりか、かえって逆効果になることもあるから、気をつけなさい」というのが、真意なのです。

憍慢	きょうまん	わかってもないのに、わかったと思ひ込むこと
懈怠	けだい	怠けたり、余計なことに心を奪われていたりすること
計我	けいが	なにごとにも自己中心に考えること
浅識	せんしき	ものごとの表面だけを見て、根本をつかもうとする心がけがないこと
著欲	じゃくよく	肉体と物質の欲にとらわれていること
不解	ふげ	なんでも自己流に解釈して、大切な点を理解しないこと
不信	ふしん	そんなことはありえないなどと、あさはかな考えからこのお経を信じないこと
顰蹙	ひんしゆく	この教えに対して顔をしかめる、すなわち反感を表わすこと
疑惑	ぎわく	このお経の真実を疑い、ためらう心を起こすこと
誹謗	ひぼう	このお経の悪口をいうこと
軽善	きょうぜん	このお経を読んだり、書いたり、持(たも)ったりしている人に対して、善いことなのに軽蔑すること
憎善	ぞうぜん	このお経を読んだり、書いたり、持(たも)ったりしている人に対して、善いことなのに憎らしく思うこと
嫉善	しつぜん	このお経を読んだり、書いたり、持(たも)ったりしている人に対して、善いことなのに、それに対してねたみ心を起こすこと
恨善	こんぜん	このお経を読んだり、書いたり、持(たも)ったりしている人に対して、善いことなのに、それに対する恨み心を起こすこと

(2) 仏は罰を与えない

この謗法に対する報いが、次にいろいろとあげられていますが、ここでぜひ心しなければならないことは、これらの報いというものは、仏が罰として与えられるのでは絶対にありません。

(3) 仏は万物を生かしている真理

仏は人を罰するような、すなわち人間と相対的な関係にあるものではないのです。また、仏とは、「万物を生かしている真理」でありますから、人を地獄におとしたり、動物にしてしまったりするような「慈悲心に逆行する作用」をされるはずがないのです。

(4) 自分が自分に罰を与える

それでは、何がそんな罰を与えるのか。いうまでもなく、自分自身です。自分自身の迷いです。迷いはよく黒雲にたとえられますが、たしかに自分で自分の仏性をおおいかくしている黒雲なのです。仏性の光がおおいかくされているために、そこには暗黒が生ずる。さまざまな悪い状態が起こってくる。これが、みずから自分に与えた罰なのです。

(5) 仏は「生かしてくださる方」

そこで、もしこの迷いの黒雲を吹き払えば、いつでも仏性は輝きだしてくるのです。だから、けっして仏を恐れてはいけません。仏は、いつ、いかなるときでも、われわれ衆生を「生かしてくださる方」だということを、しっかり心に理解し、信じていなければならないのです。

【参考】曼荼羅（庭野日敬著『新釈法華三部経9』p.209～211）

1. 曼荼羅

薬王菩薩の陀羅尼の中に「曼哆羅（まんたら）」という言葉がでてきます。曼哆羅は、曼荼羅（まんだら）と同義とされ、真実でいつわりのないことばのことです。

梵語のマンダラ（曼荼羅）は、〈壇（だん）〉〈輪円具足（りんえんぐそく）〉〈聚集（じゅしゅう）〉などと訳されます。

2. 曼荼羅の起源

むかしインドで、地上を清めて円形をえがき、そこを神聖な場所（壇）としてありとあらゆる世界の諸神の来集を仰いだのが、その起源だといわれており、そこから〈輪円具足〉という訳ができたのでありましょう。

3. 曼荼羅のもとの意味

しかし、マンダラのもとの意味は〈まじりけのない本質のもの〉ということです。この宇宙の本質は、真如つまり、悟りの世界であり、それがまじりなく、完全円満にととのっているすがたがマンダラです。これが〈輪円具足〉の抽象的な意味です。

4. 絶対境の具体化

その絶対境に具体性をもたせて考えれば、仏・菩薩が充満し、その功德が満ち満ちている世界と見ることができますから、〈諸仏聚（しょぶつじゅ）〉とも〈功德聚（くどくじゅ）〉ともいい、ひっくるめて〈聚集〉と訳されているわけです。

5. 具体化する理由

なぜこのように具体化して考えるかといいますと、一般の人にとっては、宇宙の本質という哲学的な考えや、真如という目に見えぬもののことを聞かされても、あまりピンとこないからです。

「なるほどそうか」と、いちおうは理解できるのですが、どうしてもハッキリした像が心に結ばれないのです。それは当然のことであって、心の焦点をどこに合わせてよいかわからないからです。

そこで、その宇宙の本質とか真如というものを人格化し、仏・菩薩とその功德が充満しているすがたとして心にえがけば、かなりハッキリした信仰の対象となってきます。

さらに、地上に円をえがいて、その場所すなわち〈壇〉にすべての仏・菩薩の来臨を仰ぐというふうに具体性をもたせれば、ますますそこに帰依の念を集中することができるわけです。

6. 仏教における曼荼羅

それと同じ意味で、後世の仏教徒たちは、仏・菩薩の充満したありさまを絵や図にあらわして、尊崇の対象としました。それが真言宗その他で用いられている曼荼羅です。

【参考】陀羅尼（経文＝『訓訳妙法蓮華経并開結』、和訳＝庭野日敬著『新釈法華三部経9』）

1. 薬王菩薩の陀羅尼

あに まに まね ままね しれ しゃりて しゃみや しゃびたい せんで もくて もくたび しゃび あいしゃ
 安爾 曼爾 摩禰 摩摩禰 旨隸 遮梨第 除咩 除履多瑋 羶帝 目帝 目多履 娑履 阿瑋娑
 び そうび しゃび しゃえ あしゃえ あぎに せんで しゃび だらに あろきよばさいはしゃびしゃに ねびて
 履 桑履 娑履 叉裔 阿叉裔 阿耆膩 羶帝 除履 陀羅尼 阿盧伽娑娑簸庶毘叉膩 禰毘剌
 あべんたらねびて あただはれしゅだい うくれ むくれ あられ はられ しゅきゃし あさんまさんび ぼっだ
 阿便哆邏禰履剌 阿宣哆波隸輸地 欧究隸 牟究隸 阿羅隸 波羅隸 首迦差 阿三磨三履 仏駄
 びきりじって だるまはりして そうぎやねくしゃね ぼしゃぼしゃしゅだい まんたら まんたらしややた うろた うろ
 毘吉利祇帝 達磨波利差帝 僧伽涅槃沙禰 娑舍婆舍輸地 曼哆羅 曼哆羅叉夜多 郵楼哆 郵楼
 たきょうしゃりや あしゃや あしゃやたや あぼろ あまにやなたや
 哆僑 舍略 惡叉邏 惡叉治多治 阿婆盧 阿摩若那多夜

不思議よ 思惟よ 意念よ 無心よ 永遠よ 修業よ 寂然よ 淡泊よ 玄黙よ 解脱よ 濟度よ
 平等よ 無邪心よ 心の平和よ 平等な見方よ 迷いの滅尽よ 無尽の善よ 解脱の徹底よ 寂
 かに動揺しない人よ 淡泊な心よ 総持よ 觀察よ 光明よ みずからをよりどころとする心よ
 究極の清浄よ 凹凸のない平坦よ 高低のない平坦よ 回転しない心よ 旋ることもない心よ 清
 浄の眼よ 等しくして等しき所なきことよ 悟りの絶対境よ 法の完全な觀察よ 教団の完全な和
 合よ 明快な説法よ 真言よ 真言に安住する人よ 無尽のはたらきよ 響きわたる声よ 大衆の
 声に対する明察よ 教えの理解よ 無尽の教えよ 顧慮することなく法に従う自在の境地よ

2. 勇施菩薩の陀羅尼

ざれ まかざれ うつき もつき あれ あらはて ねれて ねれたはて いちに いちに しちに
 座隸 摩訶座隸 郁枳 目枳 阿隸 阿羅婆第 涅隸第 涅隸多婆第 伊緻柅 韋緻柅 旨緻柅
 ねれちに ねれちはち
 涅隸墀柅 涅梨墀婆底

光炎よ 大光炎よ 智慧の光明よ 光明をのべひろげるものよ 順調な成就よ 富有よ 歡喜よ
 欣然たるものよ 安住よ 秩序を立てるものよ 永住よ 迎合することのないものよ 無意味に集
 まることのないものよ

3. 毘沙門天王の陀羅尼

あり なり となり あなろ なび くなび
 阿梨 那梨 兎那梨 阿那盧 那履 拘那履

富有よ 遊戯を調えるものよ 無戯よ 無量よ 富のないものよ すべてを富まらずにはおかぬ女神
 よ

4. 持国天王の陀羅尼

あきやね きゃね くり けんだり せんだり まとうぎ じょうぐり ぶろしゃに あっち
阿伽禰 伽禰 瞿利 乾陀利 旃陀利 摩躋耆 常 求利 浮楼莎柅 頰底

無数の 有数福女神よ 白光女神よ 持香女神よ 曜黒女神よ 摩躋耆女神よ 大体軀毒女神よ
至高の真理を順述することを得せしめよ

5. 十人の羅刹女及び鬼子母の陀羅尼

いでび いでび いでび あでび いでび でび でび でび でび でび ろけ ろけ ろけ
伊提履 伊提泯 伊提履 阿提履 伊提履 泥履 泥履 泥履 泥履 泥履 楼醯 楼醯 楼醯
ろけ たけ たけ たけ とけ とけ
楼醯 多醯 多醯 多醯 兜醯 兕醯

これにおいて ここにおいて これにおいて 民において これにおいて 無我よ 無我よ 無我
よ 無我よ 無我よ すでに興った すでに興った すでに興った すでに興った しかも立つ
しかも立つ しかも立つ よく持ち 害を加うるものはない

6. 普賢菩薩勸発品における普賢菩薩の陀羅尼

あたんだい たんだはだい たんだはて たんだくしゅれ たんだしゅだれ しゅだれ しゅだらはち ぼだはせんね さるぼ
阿檀地 檀陀婆地 檀陀婆帝 檀陀鳩餘隸 檀陀修陀隸 修陀隸 修陀羅婆底 仏駄波羶禰 薩婆
だらに あばたに さるぼばしゃ あばたに しゅあばたに そうぎやはびしゃに そうぎやね きゃだに あそうぎ
陀羅尼・阿婆多尼 薩婆婆沙・阿婆多尼 修阿婆多尼 僧伽婆履叉尼 僧伽涅・伽陀尼 阿僧祇
そうぎやはぎやだい てれあだそうぎやとりやあらて はらて さるぼそうぎや さんまじ ぎゃらんだい さるぼだるま しゅはりせつ
僧伽婆伽地 帝隸阿惰僧伽兜略阿羅帝・波羅帝 薩婆僧伽・三摩地・伽蘭地 薩婆達磨・修波利刹
て さるぼさった るだきょうしゃりや あとぎやだい しんなびきりだいて
帝 薩婆薩埵・楼駄橋 舍略・阿兕伽地 辛阿毘吉利地帝

我見をなくし 小我を除き 我方便を去れば 平和であろう (大我は) 心も柔軟に 行ないも柔
軟に 円滑にするであろう 仏陀を觀ずれば 一切の総持を旋らし 一切の言行を変えず それら
は人から人へとつぎつぎにおよぼしていくであろう 僧伽(サンガ)の潰滅を試練し 僧伽の非を
除き 無数の僧伽の執着を去れば 三世に無限であろう 一切の僧伽が現象を超越し 一切の諸法
を学び 一切衆生の声を悟れば あたかも獅子が遊び戯れるがように自由自在 おそれるところが
ないであろう